

うたとかたりの対人援助学

第14回 京都のわらべうたを歌おう

鵜野 祐介

オンライン授業の模擬体験

この連載はこれまで、筆者がうたやかたりについて各地で取材して記録したフィールドノーツを元に構成しようと心がけてきました。ところが、今般のコロナ禍によってフィールドワークはできず、さりとて古いネタを使いまわすのも気が引けます。

そこで思いついたのが、筆者が担当している「教育人間学実習Ⅲ」のオンライン授業用シナリオと、受講生のコメントを紹介するというアイデアです。

オンライン授業には①「同期型」、②「非同期型」、③「複合型」があり、①は「ビデオ会議ツールのZoomなどを使って教員と学生がリアルタイムで双方向の授業を行う」、②は「教員がオンライン上に準備した教材や資料、音声、動画に学生がアクセスして学び、オンライン上で課題やコメントシートを提出する」、③は①と②を組み合わせたものです（朝日新聞Edu A5月24日）号p.1より）。

「教育人間学実習」は5回シリーズで、当初は「1. うたあそび、2. 絵本読みかたり、3. 紙芝居上演、4. 昔話を聞く、5. 昔話を語る」という計画でしたが、お手玉や絵本や紙芝居は手もとにない受講生が多いと思われたため、わらべうたを歌い、民話（民間説話）を語ることに絞って、上述の②の方式で実施することにしました。今回ご紹介するのはその第2回「京都のわらべうたを歌おう」の授業（5/20）のために、WEB上に掲載したシナリオの一部です。

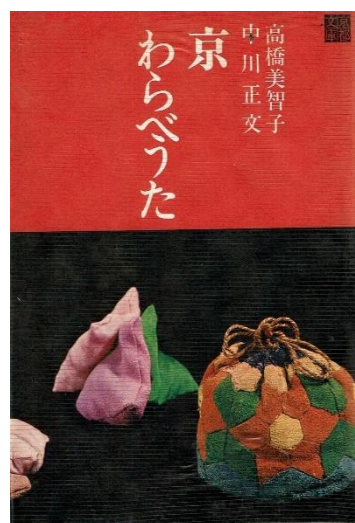
読者の皆様も、実際にオンライン授業を受けているつもりで読んで歌って下さい。また、受講生（教

育人間学専攻3回生）が寄せたコメントを、今後の実践に活用していただけると嬉しいです。

京都のわらべうたを歌おう

本学衣笠キャンパスの所在地は京都ですので、京都のわらべうたを5曲紹介します。類似するうた（「類歌」）は全国各地にありますので、ぜひ自分の出身地の類歌を調べてみてください。今回参考にしたテキストは、採譜・高橋美智子、文・中川正文『京わらべうた』（駸々堂出版1972）です。本書は『日本わらべ歌全集』（柳原書店1978～）よりも6年早く、地元出版社から「京都文庫」の一冊として出版されたもので、装丁や構成にも細やかな気配りが感じられる上品な書籍です。

今回紹介する5つの唄はいずれも配信動画サイトYouTubeで聴くことができます。メロディーを確認して、自分でも繰り返し歌ってみてください。



やしろうめ
「優女」(子守唄)

優女 優女 京の町の優女

売ったるものを見しろうめ

きんらんどんす あや ちりめん
金襴緞子 綾や緋縮緬

どんどん縮緬 どん縮緬

これは本願寺八世の蓮如上人が作ったと伝えられる子守唄です。その真偽は定かではありませんが、元は、正月の万歳の寿詞（ことほぎうた）として歌われていたものの一部分と考えられています。

中川正文は次のように解説しています。「京のおんなを、やしろうめ——優しい女と感じる視点は、たぶん旅びとの目か、物乞いの目ではなかったろうか。都として、室町幕府の所在地として、諸国から数おおく流入してくる旅びとや法下師たちの目に映った、京の繁栄に対する一つの憧憬や媚びがもたらした、ふしぎに明るい中世風の雰囲気をたたえた、まとまった曲である。

京の子どもたちは、こういう歌で、ほんとうに眠りについたものかどうか。むしろ気分が華やかではずみ、眠れないのではないか、という疑問すら起きてくる。それほどまでに音楽性の高い、さわやかな曲だ」（高橋・中川 1972：90）。

優女 優女

やしろうめ やしろうめ おうーのまーちの やしろうめ
うったるものを見しろうめ きんらん どんす
あ や や ひじりめん どんどんちりめん どんちりめん

あたご
「愛宕さんへまいて」(しぐさ遊び唄)

愛宕さんへまいて 細道とおって
花いっぼんぬすんで 毛虫にさされて
ほうぼうで目もろて

口惜しや腹だちや 音羽の滝や ところてん
コチョコチョココチョコ

これは子どもと対面して、唄にあわせて手ぶりとしぐさを交えながら歌う遊ばせ唄です。本来は相手の顔や身体に触っておこなうスキンシップの唄ですが、今回は自分の顔や身体を触って、やってみてください。

- 「愛宕さんへまいて」＝頭を4回タップする（軽く叩く）。
- 「細道とおって」＝頭から眉と眉の間を指でなぞって下がる。
- 「花いっぼんぬすんで」＝鼻をつまんでもぎ取ろうとする。
- 「毛虫にさされて」＝両方の眉を2回ずつタップ
- 「ほうぼうで目もろて」＝左右の頬と目を順番にタップ
- 「口惜しや腹だちや」＝口とお腹を2回ずつタップ
- 「音羽の滝や ところてん」＝小便の出る場所と肛門付近を1回ずつ押さえる。
- 「コチョコチョココチョコ」＝脇の下をくすぐる。

愛宕さんへまいて

あたごさんへ まいて ほそみち とおって はないっぼん
ぬすんで けむしに さされて ほうぼうで めもろて
くちおしや ほちだちや おとわのたきや ところてん コチョコチョコ

音羽の滝は清水寺にある滝です。また、心太（ところてん）を作る際、ピストンを押すと穴からムギューと出てくる心太に、肛門から出るウンチを連想した感性には感心します。

「子どもたちは、コチョコチョコされる最後の瞬間をびくびくして予測しながら、目や鼻などをおさえていくスリルを味わう。子どもたちの心の動き方を巧妙にふまえた遊ばせ歌だ。こういうものは集団保育

では、なかなかできないものである。親子や兄弟などではじめてなし得る、個人的なゲームなのだ」(同上99)。

コロナ禍が一段落したら、家族や親戚の子どもにぜひ試してみてください。

「ひとめふため」(羽根つきのうた)

ひとめ ふため みやこし よめご
 いつやの むさし ななやの やつし
 ここのや とおや
 ひやふ みやよ いつやむ ななや こことお

「京の正月は、おけら詣りで明ける。祇園八坂神社の神火を火縄にうつし、それをわが家に持ち帰り、雑煮の火種にするのだ。(中略)そして元旦は、いつもつきぬけるような晴天で、深く澄みきった青い空をあおぐことができた。四方拝*が終わって戻ってきた子どもたちは、通りへでて羽子板をついた」(同上13)。(＊四方拝：年のはじめに天地四方を拝して年災をはらい豊作を祈る儀式。平安時代以来の宮中行事だが、戦前の子どもたちは元旦の朝登校して、講堂で行われるこの儀式に参加させられていた)。

数え唄になっています。これを歌いながら、何回羽根をつけたかカウントするのです。「やつし」とは「おしゃれ」のこと。つまりこの遊びは女の子によって行われたようです。唄のメロディーあるいはイントネーションが、舞妓さんが使うような典型的な女性の京ことばなので、繰り返し聞いて歌って、京の風情を味わってください。

ひとめふため

「京の大仏つあん」(かごめ遊びの唄)

京の京の大仏つあんは 天火で焼けてな
 三十三間堂が 焼けのこった
 アラどんどんどん コラどんどんどん
 うしろの正面 どなた
 おさるキャツ キャツ キャツ
 ○○さん
 (当たらなかった場合)
 違いました 違いました 松のかげ
 (当たった場合)
 ようさいた ようさいた

遊び方は、目をつむってしゃがんだ鬼の周囲を、手をつないで輪になった子どもたちが、歌いながら廻ります。「後ろの正面どなた」で鬼が目をつむったまま立ち上がり、鬼の真後ろの子どもが「おさるキャツ キャツ キャツ」と歌うと、鬼はその子の声を聞いて名前を当てるのです。名前を言い当てられたら、その子が次の鬼になります。声色を変えて、名前を当てられないよう工夫していたようです(同上116参照)。今回は歌うだけですが、いつか実際に遊んでみてください。

京の大仏つあん

ることが多いが、今回のわらべうたは全て違う。(2) 「愛宕さんへまいって」を除けば、歴史的事実や社会を表した歌となっており、曲の中に作詞者個人の思いや存在を確認することが難しい。現在出回っている曲に対して、事実を伝えるこの唄は娯楽として生まれたのではなく、むしろ教訓や歴史を伝えるためのものとして生まれたのではなかろうか。



京のわらべうたは、私たちが普段聴いているうたと比べて使われている音階が少ないように感じた。耳がいいわけではないので実際はわからないが、ピアノでいう黒鍵の部分で奏でられるような音が多いような気がした。これが、日本古来のメロディーの共通点であり、だからこそあまり聞きなじみは無くとも懐かしく感じられたのではないかと考えた。

また、あいまいな表現ではあるが、今回聴いた五つのわらべうたはその独特のメロディーが幼いころ慣れ親しんだ「かごめかごめ」や「あぶくたった」のような懐かしさを感じるとともに、心が不安になるような不気味さを感じ、少し息がつまるような、普段懐かしさを感じるときに思う安らぎとは真逆の心持ちとなった。



私が普段聞いている歌はK-POPというジャンルの曲の歌が多いので、わらべうたとの共通点は自分の中で見つけることは出来ませんでした。

まず違う点としては歌の長さにあると思う。今我々が聞いたり、流れている曲はだいたい、4分から5分くらいの長さがあるが、わらべうたは短い。メロディーもゆっくりであるため、聞いている人が飽きないよう短くされているのではないかと考えました。わらべうたは手遊びを加えることも可能であり、大人から小さい子どもまで親しめるという点、自分がよく聞いている歌はそのジャンルが好きな人に愛されているという点で異なっていると感じました。また、今のようにCDやストリーミングなどがない時代の歌であるのにも関わらず今に至るまで伝

わっているということは、親が子にその歌を歌い、その子供がまた自分の子どもに歌うという形で伝承されてきた事がわかる。今聞いている歌がわらべうたのようにずっと受け継がれていくかと思うと、そうでないかもしれないと思える。



京のわらべうたと普段聴きなじみのある J-pop とを比較して感じたことは、京のわらべうたには怪しい雰囲気があるということです。眠りを誘うような独特の音程と音の長さの影響だと思います。私が普段聴いている J-pop の音程には怪しさはあまり感じられず、音の長さは京のわらべうたよりも短いものが多いです。

また、京のわらべうたを聴いている時や歌っている時には異次元に誘われているような不思議な感覚になりました。特に「優女」や「ひとめふため」の時にその様な感覚になりました。癒しに近いようなフワッとした感覚です。一方、J-pop の場合は、明るい曲調のものは気持ちが高揚し、暗い落ち着いた曲調のものは穏やかな気持ちになります。京のわらべ歌のように不思議な感覚になることは少ないです。

このように、京のわらべうたには怪しい雰囲気や異次元に誘われているかのような不思議な感覚になるようなものが多かったように思います。普段聴きなじみのある J-pop ではそのような感覚になることはほとんどありません。京のわらべうたがなぜそのような曲調なのか気になりました。



学生たちのコメントを読んで、それぞれ誠実かつ丁寧に記述してくれていますが、首から上だけで聴いているという印象も受けました。もしも身体を動かして遊びながら歌っていたら、「怪しさ」や「なつかしさ」だけではなく、心はずむ「楽しさ」を体感できたのではないかと思います。選曲がスローテンポのものに偏ってしまったのも関係しているかもしれません。来年度への宿題です。